

## 調査結果の概要

### 第1 発育状態

身長、体重及び座高の本県平均値と全国平均値を年齢別にみると、表1から表3のとおりである。

#### 1 身長

本県の男子の身長は、5歳、7歳、11歳、13歳から15歳及び17歳の各年齢で前年より伸びており、14歳(166.0 cm)及び17歳(171.2 cm)は過去最高となっている。

同じく女子は、5歳、8歳、10歳、12歳及び13歳の各年齢で前年より伸びており、5歳(110.6 cm)は、過去最高となっている。

10歳及び11歳では、全国と同様に、女子が男子を上回っている。

全国との比較でみると、男子は16歳を除くすべての年齢、女子は5歳から8歳、10歳及び11歳の各年齢で、本県は全国平均を上回っている(表1)。

表1 年齢別 身長の平均値 (単位: cm)

区 分	本 県						全 国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H20 (A)	H19 (B)	前年差 (A-B)	H20 (C)	H19 (D)	前年差 (C-D)	H20 (E)	H20 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	111.3	110.8	0.5	<u>110.6</u>	110.2	0.4	110.8	109.8	0.5	0.8
	6歳	117.0	117.2	0.2	116.0	116.0	0.0	116.7	115.8	0.3	0.2
小学校	7歳	122.7	122.5	0.2	121.9	121.9	0.0	122.5	121.7	0.2	0.2
	8歳	128.4	<u>128.7</u>	0.3	127.9	127.3	0.6	128.2	127.5	0.2	0.4
	9歳	134.0	134.1	0.1	133.4	133.6	0.2	133.7	133.6	0.3	0.2
	10歳	139.4	139.6	0.2	140.9	140.6	0.3	138.9	140.3	0.5	0.6
	11歳	145.6	145.4	0.2	147.2	147.4	0.2	145.3	146.8	0.3	0.4
中学校	12歳	152.7	153.4	0.7	152.0	151.9	0.1	152.6	152.1	0.1	0.1
	13歳	160.2	159.8	0.4	155.0	154.9	0.1	159.8	155.1	0.4	0.1
	14歳	<u>166.0</u>	165.4	0.6	156.5	156.7	0.2	165.4	156.6	0.6	0.1
高等学校	15歳	168.5	168.3	0.2	156.8	157.7	0.9	168.3	157.3	0.2	0.5
	16歳	169.9	169.9	0.0	157.3	158.1	0.8	170.0	157.7	0.1	0.4
	17歳	<u>171.2</u>	170.4	0.8	157.7	158.2	0.5	170.7	158.0	0.5	0.3

(注) 下線の部分は調査実施以来最高値を示す。

#### 2 体重

本県の男子の体重は、5歳、13歳及び14歳の各年齢で前年より増えている。

同じく女子は、6歳、8歳、10歳から12歳、15歳及び16歳の各年齢で前年より増えている。

11歳では、全国の10歳及び11歳と同様に、女子が男子を上回っている。

全国との比較でみると、男女ともすべての年齢で、本県は全国平均を上回っており、この状況は平成15年から6年続いている(表2)。

表2 年齢別 体重の平均値

(単位: kg)

区 分	本 県						全 国		本 県 と 全 国 と の 差		
	男			女			男	女	男	女	
	H20 (A)	H19 (B)	前年差 (A-B)	H20 (C)	H19 (D)	前年差 (C-D)	H20 (E)	H20 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	19.6	19.4	0.2	19.1	19.1	0.0	19.1	18.6	0.5	0.5
	6歳	22.1	22.2	0.1	21.7	21.5	0.2	21.5	21.0	0.6	0.7
小学校	7歳	24.6	24.8	0.2	23.9	24.1	0.2	24.2	23.6	0.4	0.3
	8歳	28.2	28.8	0.6	27.6	26.9	0.7	27.3	26.6	0.9	1.0
	9歳	31.9	31.9	0.0	30.7	30.7	0.0	30.8	30.1	1.1	0.6
	10歳	35.8	35.8	0.0	35.4	35.1	0.3	34.3	34.4	1.5	1.0
	11歳	39.4	40.1	0.7	41.0	40.7	0.3	38.8	39.3	0.6	1.7
中学校	12歳	45.9	46.2	0.3	45.5	44.9	0.6	44.5	44.2	1.4	1.3
	13歳	51.5	50.2	1.3	48.7	48.7	0.0	49.5	47.7	2.0	1.0
	14歳	56.0	55.6	0.4	51.3	51.8	0.5	54.9	50.4	1.1	0.9
高等学校	15歳	61.6	<u>62.8</u>	1.2	53.5	52.4	1.1	59.8	52.0	1.8	1.5
	16歳	61.9	62.3	0.4	54.5	54.2	0.3	61.6	53.0	0.3	1.5
	17歳	63.6	64.7	1.1	53.6	55.1	1.5	63.4	53.2	0.2	0.4

(注) 下線の部分は調査実施以来最高値を示す。

3 座高

本県の男子の座高は、5歳、13歳、14歳及び17歳の各年齢で前年より伸びており、14歳(88.7cm)及び17歳(92.0cm)は、過去最高となっている。

同じく女子は、5歳、8歳及び10歳の各年齢で前年より伸びている。

10歳から12歳では、全国と同様に、女子が男子を上回っている。

全国との比較でみると、男子は16歳を除くすべての年齢、女子は5歳から8歳、10歳から12歳及び14歳の各年齢で、本県は全国平均を上回っている(表3)。

表3 年齢別 座高の平均値

(単位: cm)

区 分	本 県						全 国		本 県 と 全 国 と の 差		
	男			女			男	女	男	女	
	H20 (A)	H19 (B)	前年差 (A-B)	H20 (C)	H19 (D)	前年差 (C-D)	H20 (E)	H20 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	62.5	62.2	0.3	62.1	61.9	0.2	62.1	61.6	0.4	0.5
	6歳	65.1	65.1	0.0	64.7	64.7	0.0	65.0	64.6	0.1	0.1
小学校	7歳	67.8	67.8	0.0	67.5	67.6	0.1	67.7	67.3	0.1	0.2
	8歳	70.5	70.6	0.1	70.3	69.9	0.4	70.3	70.0	0.2	0.3
	9歳	73.0	<u>73.1</u>	0.1	72.7	72.9	0.2	72.8	72.8	0.2	0.1
	10歳	75.2	75.4	0.2	76.3	76.2	0.1	75.0	76.0	0.2	0.3
	11歳	78.0	78.1	0.1	79.6	79.8	0.2	77.8	79.3	0.2	0.3
中学校	12歳	81.7	81.9	0.2	82.5	82.5	0.0	81.4	82.2	0.3	0.3
	13歳	85.3	85.1	0.2	83.8	84.1	0.3	85.0	83.8	0.3	0.0
	14歳	<u>88.7</u>	88.3	0.4	85.0	<u>85.2</u>	0.2	88.2	84.9	0.5	0.1
高等学校	15歳	90.3	<u>90.7</u>	0.4	85.4	<u>85.8</u>	0.4	90.2	85.4	0.1	0.0
	16歳	91.1	<u>91.4</u>	0.3	85.5	<u>86.1</u>	0.6	91.2	85.6	0.1	0.1
	17歳	<u>92.0</u>	91.8	0.2	85.5	<u>85.8</u>	0.3	91.7	85.8	0.3	0.3

(注) 下線の部分は調査実施以来最高値を示す。

#### 4 身長、体重及び座高の推移

##### 身長推移

##### 男子

各年齢間の身長差は12歳と13歳の間(7.5 cm)が最も大きく、16歳と17歳の間(1.3 cm)が最も小さい(表4)。

親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は14歳で、親の世代より3.6 cm高い(表4)。

平成2年度生まれ(年度調査時17歳)と30年前の昭和35年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成2年度生まれが11歳(7.2 cm)、親の世代が11歳(8.4 cm)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、7歳、9歳、10歳及び16歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている(表5)。

##### 女子

各年齢間の身長差は9歳と10歳の間(7.5 cm)が最も大きく、14歳と15歳の間(0.3 cm)が最も小さい(表4)。

親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は10歳で、親の世代より2.3 cm高い(表4)。

平成2年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和35年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成2年度生まれが9歳(7.4 cm)、親の世代が10歳(7.3 cm)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳、7歳、9歳及び15歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている(表5)。

表4 身長の年齢別平均値

(単位: cm)

区 分			H20 (A)	年齢差	H19 (B)	差 (A - B)	S53 親の世代(C)	差 (A - C)
男 子	幼稚園	5歳	111.3		110.8	0.5	109.9	1.4
		小学校	6歳	117.0	5.7	117.2	0.2	115.7
	7歳		122.7	5.7	122.5	0.2	121.4	1.3
	8歳		128.4	5.7	128.7	0.3	126.6	1.8
	9歳		134.0	5.6	134.1	0.1	132.0	2.0
	10歳		139.4	5.4	139.6	0.2	136.9	2.5
	11歳		145.6	6.2	145.4	0.2	142.5	3.1
	中学校		12歳	152.7	7.1	153.4	0.7	150.5
		13歳	160.2	<u>7.5</u>	159.8	0.4	157.2	3.0
		14歳	166.0	5.8	165.4	0.6	162.4	3.6
	高等学校	15歳	168.5	2.5	168.3	0.2	167.0	1.5
		16歳	169.9	1.4	169.9	0.0	169.1	0.8
		17歳	171.2	1.3	170.4	0.8	169.1	2.1
	女 子	幼稚園	5歳	110.6		110.2	0.4	109.4
小学校			6歳	116.0	5.4	116.0	0.0	114.1
		7歳	121.9	5.9	121.9	0.0	120.4	1.5
		8歳	127.9	6.0	127.3	0.6	126.0	1.9
		9歳	133.4	5.5	133.6	0.2	131.6	1.8
		10歳	140.9	<u>7.5</u>	140.6	0.3	138.6	2.3
		11歳	147.2	6.3	147.4	0.2	145.0	2.2
		中学校	12歳	152.0	4.8	151.9	0.1	150.6
13歳			155.0	3.0	154.9	0.1	153.5	1.5
14歳			156.5	1.5	156.7	0.2	155.2	1.3
高等学校		15歳	156.8	0.3	157.7	0.9	156.2	0.6
		16歳	157.3	0.5	158.1	0.8	156.7	0.6
		17歳	157.7	0.4	158.2	0.5	156.6	1.1

(注) 下線の部分は年齢差が最も大きい値を示す。

図1 身長年齢別平均値の推移(男子)

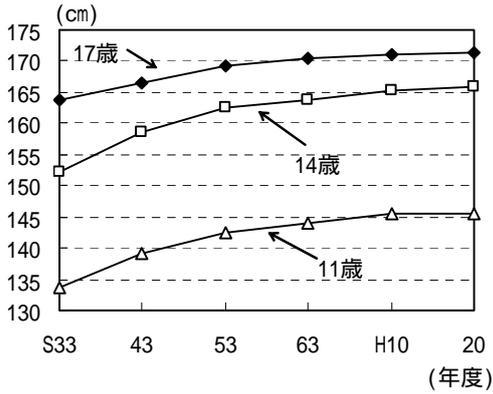


図2 身長年齢別平均値の推移(女子)

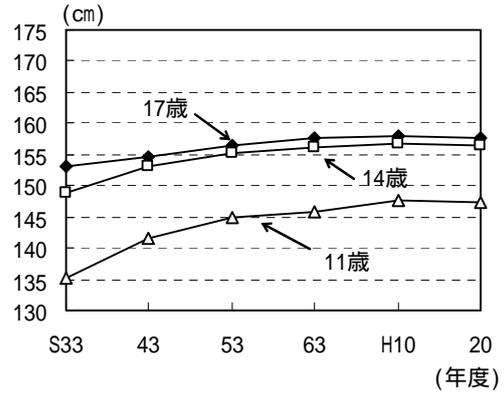


表5 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(身長) (単位: cm)

区分	男子		女子	
	平成2年度生まれ (平成20年度17歳)	昭和35年度生まれ (昭和53年度17歳)	平成2年度生まれ (平成20年度17歳)	昭和35年度生まれ (昭和53年度17歳)
総発育量	60.0	60.6	47.3	48.9
幼稚園				
5歳時	6.2	4.9	6.0	4.9
6歳時	5.3	5.8	5.7	5.7
7歳時	5.6	5.2	5.7	5.4
小学校				
8歳時	6.0	6.0	6.0	6.4
9歳時	5.3	4.2	<u>7.4</u>	5.4
10歳時	6.3	4.8	5.9	<u>7.3</u>
11歳時	<u>7.2</u>	<u>8.4</u>	4.7	5.8
中学校				
12歳時	6.8	7.0	3.6	3.9
13歳時	5.4	6.9	1.2	2.3
14歳時	3.4	5.0	0.4	1.2
高等学校				
15歳時	1.2	1.4	1.1	0.6
16歳時	1.3	1.0	0.4	0.0

(注) 1 年間発育量とは、例えば、平成2年度生まれの「5歳時」の年間発育量は、平成9年度調査6歳の数値から平成8年度調査5歳の数値を減じたものである。  
 2 下線の部分は、最大の年間発育量を示す。  
 3 昭和35年度生まれの9歳の数値は全国値によった(昭和45年度調査が調査制度改編期につき、当該年度の都道府県数値(当該年度の9歳が昭和35年度生まれに当たる。))は、標本数が少ないことから公表していないため。)

図3 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(身長・男子)

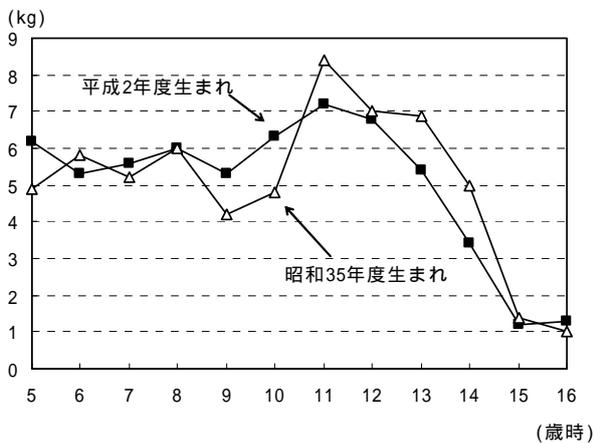
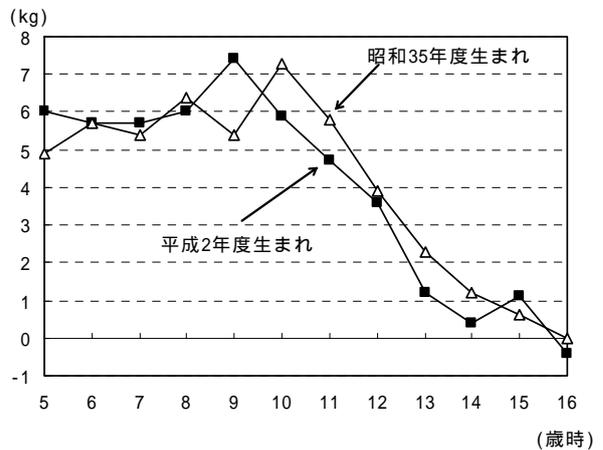


図4 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(身長・女子)



## 体重の推移

### 男子

各年齢間の体重差は、11歳と12歳の間(6.5kg)が最も大きく、15歳と16歳の間(0.3kg)が最も小さい(表6)。

親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は13歳で、親の世代より5.5kg重い(表6)。

平成2年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和35年度生まれ(親の世代)の発育量と比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成2年度生まれが11歳(6.0kg)、親の世代が13歳(5.8kg)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳から11歳及び16歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている(表7)。

### 女子

各年齢間の体重差は、10歳と11歳の間(5.6kg)が最も大きく、16歳と17歳の間(0.9kg)が最も小さい(表6)。

親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は11歳で、親の世代より3.2kg重い(表6)。

平成2年度生まれ(今年度調査時17歳)と30年前の昭和35年度生まれ(親の世代)の発育量を比べると、年間発育量が最大となる時期は、平成2年度生まれが11歳(5.3kg)、親の世代が11歳(5.9kg)を示している。

なお、現在の17歳は、5歳から7歳及び9歳の各歳時において親の世代の発育量を上回っている(表7)。

**表6 体重の年齢別平均値** (単位:kg)

区 分			H20 (A)	年齢差	H19 (B)	差 (A - B)	S53 親の世代(C)	差 (A - C)
男 子	幼稚園	5歳	19.6		19.4	0.2	18.9	0.7
		小学校	6歳	22.1	2.5	22.2	0.1	20.9
	7歳		24.6	2.5	24.8	0.2	23.2	1.4
	8歳		28.2	3.6	28.8	0.6	26.1	2.1
	9歳		31.9	3.7	31.9	0.0	28.7	3.2
	10歳		35.8	3.9	35.8	0.0	32.4	3.4
	11歳		39.4	3.6	40.1	0.7	36.1	3.3
	中学校	12歳	45.9	<u>6.5</u>	46.2	0.3	41.9	4.0
		13歳	51.5	5.6	50.2	1.3	46.0	5.5
		14歳	56.0	4.5	55.6	0.4	51.4	4.6
	高等学校	15歳	61.6	5.6	62.8	1.2	56.2	5.4
		16歳	61.9	0.3	62.3	0.4	59.8	2.1
		17歳	63.6	1.7	64.7	1.1	59.1	4.5
	女 子	幼稚園	5歳	19.1		19.1	0.0	19.0
小学校			6歳	21.7	2.6	21.5	0.2	20.0
		7歳	23.9	2.2	24.1	0.2	22.5	1.4
		8歳	27.6	3.7	26.9	0.7	25.9	1.7
		9歳	30.7	3.1	30.7	0.0	28.8	1.9
		10歳	35.4	4.7	35.1	0.3	32.8	2.6
		11歳	41.0	<u>5.6</u>	40.7	0.3	37.8	3.2
中学校		12歳	45.5	4.5	44.9	0.6	43.1	2.4
		13歳	48.7	3.2	48.7	0.0	46.0	2.7
		14歳	51.3	2.6	51.8	0.5	49.8	1.5
高等学校		15歳	53.5	2.2	52.4	1.1	52.1	1.4
		16歳	54.5	1.0	54.2	0.3	53.2	1.3
		17歳	53.6	0.9	55.1	1.5	53.2	0.4

(注) 下線の部分は年齢差が最も大きい値を示す。

図5 体重の年齢別平均値の推移(男子)

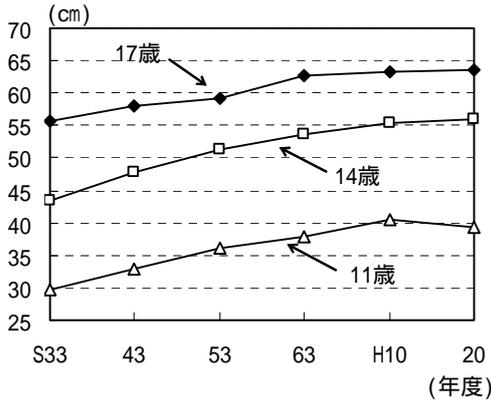


図6 体重の年齢別平均値の推移(女子)

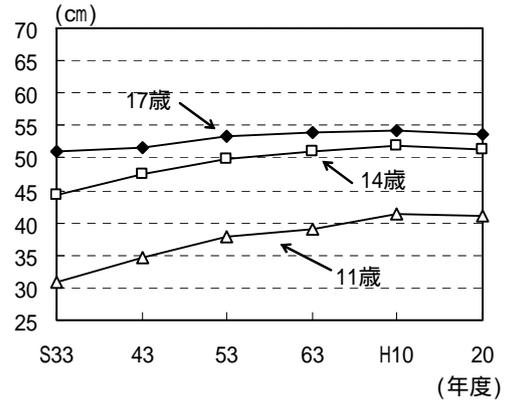


表7 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(体重) (単位: kg)

区 分	男 子		女 子		
	平成2年度生まれ (平成20年度17歳)	昭和35年度生まれ (昭和53年度17歳)	平成2年度生まれ (平成20年度17歳)	昭和35年度生まれ (昭和53年度17歳)	
総 発 育 量	43.7	41.2	34.1	35.8	
幼稚園 5 歳時	2.1	1.8	2.3	1.7	
小学校	6 歳時	2.9	2.3	2.8	2.6
	7 歳時	3.4	2.4	3.2	1.9
	8 歳時	4.3	3.2	3.6	3.6
	9 歳時	3.6	2.4	4.5	3.3
	10 歳時	4.1	4.0	4.5	5.2
中学校	11 歳時	<u>6.0</u>	5.6	<u>5.3</u>	<u>5.9</u>
	12 歳時	4.2	5.2	3.5	4.1
	13 歳時	5.2	<u>5.8</u>	2.7	3.5
高等学校	14 歳時	5.0	5.4	2.0	2.4
	15 歳時	1.6	2.1	0.3	1.0
	16 歳時	1.3	1.0	0.6	0.6

(注) 1 年間発育量とは、例えば、平成2年度生まれの「5歳時」の年間発育量は、平成9年度調査6歳の数値から平成8年度調査5歳の数値を減じたものである。  
 2 下線の部分は、最大の年間発育量を示す。  
 3 昭和35年度生まれの9歳の数値は全国値によった(昭和45年度調査が調査制度改編期につき、当該年度の都道府県数値(当該年度の9歳が昭和35年度生まれに当たる。))は、標本数が少ないことから公表していないため。)

図7 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(体重・男子)

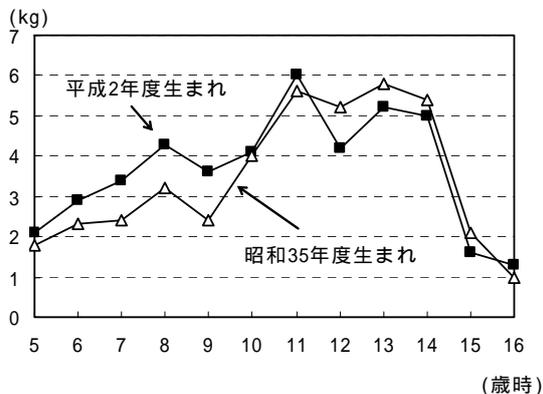
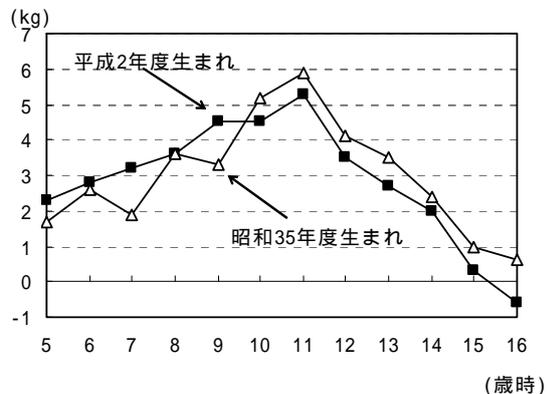


図8 平成2年度生まれと昭和35年度生まれの者の年間発育量の比較(体重・女子)



座高の推移

男子

各年齢間の座高差は、11歳と12歳の間(3.7 cm)が最も大きく、15歳と16歳の間(0.8 cm)が最も小さい(表8)。

男子の座高を親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は14歳で、親の世代よりも2.2 cm高い(表8)。

女子

各年齢間の座高差は、9歳と10歳の間(3.6 cm)が最も大きく、16歳と17歳の間(0.0 cm)が最も小さい(表8)。

女子の座高を親の世代(30年前・昭和53年度調査)と比べると、最も差のある年齢は11歳で、親の世代よりも1.5 cm高い(表8)。

表8 座高の年齢別平均値

(単位: cm)

区 分			H20 (A)	年齢差	H19 (B)	差 (A - B)	S53 親の世代(C)	差 (A - C)
男 子	幼稚園	5歳	62.5		62.2	0.3	62.0	0.5
		小学校	6歳	65.1	2.6	65.1	0.0	65.0
	7歳		67.8	2.7	67.8	0.0	67.5	0.3
	8歳		70.5	2.7	70.6	0.1	69.9	0.6
	9歳		73.0	2.5	73.1	0.1	72.2	0.8
	10歳		75.2	2.2	75.4	0.2	74.2	1.0
	11歳		78.0	2.8	78.1	0.1	76.5	1.5
	中学校	12歳	81.7	<u>3.7</u>	81.9	0.2	80.2	1.5
		13歳	85.3	3.6	85.1	0.2	83.4	1.9
		14歳	88.7	3.4	88.3	0.4	86.5	2.2
	高等学校	15歳	90.3	1.6	90.7	0.4	89.3	1.0
		16歳	91.1	0.8	91.4	0.3	90.5	0.6
		17歳	92.0	0.9	91.8	0.2	90.2	1.8
	女 子	幼稚園	5歳	62.1		61.9	0.2	61.7
小学校			6歳	64.7	2.6	64.7	0.0	63.9
		7歳	67.5	2.8	67.6	0.1	66.7	0.8
		8歳	70.3	2.8	69.9	0.4	69.4	0.9
		9歳	72.7	2.4	72.9	0.2	71.9	0.8
		10歳	76.3	<u>3.6</u>	76.2	0.1	75.0	1.3
		11歳	79.6	3.3	79.8	0.2	78.1	1.5
中学校		12歳	82.5	2.9	82.5	0.0	81.8	0.7
		13歳	83.8	1.3	84.1	0.3	83.1	0.7
		14歳	85.0	1.2	85.2	0.2	84.2	0.8
高等学校		15歳	85.4	0.4	85.8	0.4	85.0	0.4
		16歳	85.5	0.1	86.1	0.6	85.3	0.2
		17歳	85.5	0.0	85.8	0.3	85.0	0.5

(注) 下線の部分は年齢差が最も大きい値を示す。

## 第2 健康状態

### 1 疾病・異常の被患率等別状況

疾病・異常の被患率等を階層別にみると、表9のとおりである。

被患率等が最も高いのは、むし歯で、幼稚園 62.4%、小学校 73.4%、中学校 64.1%、高等学校 73.0%となっている。

次に高いのは、裸眼視力1.0未満の者で、小学校 31.9%、中学校 55.8%、高等学校 60.8%となっている(表9)。

表9 疾病・異常の被患率等

(単位：%)

区分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	
90%以上					
80%以上～90%未満					
70～80		むし歯 73.4		むし歯 73.0	
60～70	むし歯 62.4		むし歯 64.1	裸眼視力1.0未満の者 60.8	
40～60			裸眼視力1.0未満の者 55.8		
20～40		裸眼視力1.0未満の者 31.9			
10～20					
1～10	8～10	鼻・副鼻腔疾患 8.4			
	6～8			歯垢の状態 7.3 歯肉の状態 7.1	
	4～6	耳疾患 4.7	歯垢の状態 4.4 鼻・副鼻腔疾患 4.2	歯列・咬合 5.3	
	2～4	歯列・咬合 3.7	歯列・咬合 3.8	歯列・咬合 3.8	心電図異常 3.1
		耳疾患 2.9	口腔咽喉頭疾患・異常 3.5	心電図異常 3.5	鼻・副鼻腔疾患 2.6
		アトピー性皮膚炎 2.1	アトピー性皮膚炎 3.2	歯肉の状態 3.3	眼の疾病・異常 2.2
			ぜん息 3.2	口腔咽喉頭疾患・異常 3.0	
			歯・口腔のその他の疾病・異常 3.1	眼の疾病・異常 2.8	
			眼の疾病・異常 2.8	アトピー性皮膚炎 2.2	
			栄養状態 2.8	ぜん息 2.1	
	歯垢の状態 2.6				
	心電図異常 2.2				
1～2	鼻・副鼻腔疾患 1.7 口腔咽喉頭疾患・異常 1.7 眼の疾病・異常 1.6 ぜん息 1.1	その他の疾病・異常 1.3	耳疾患 1.9 栄養状態 1.4 その他の疾病・異常 1.4 歯・口腔のその他の疾病・異常 1.3 蛋白検出の者 1.1	歯・口腔のその他の疾病・異常 1.5 その他の疾病・異常 1.5 アトピー性皮膚炎 1.4 蛋白検出の者 1.2 ぜん息 1.0	
0.1～1	0.5～1	歯・口腔のその他の疾病・異常 0.8	難聴 0.9	難聴 0.7	顎関節 0.7
		その他の疾病・異常 0.8	歯肉の状態 0.8	せき柱・胸郭 0.5	難聴 0.5
		言語障害 0.7	その他の皮膚疾患 0.8		耳疾患 0.5
		その他の皮膚疾患 0.5	心臓の疾病・異常 0.5		口腔咽喉頭疾患・異常 0.5
	0.1～0.5	栄養状態 0.4	結核対策委員会の要検討者 0.4	心臓の疾病・異常 0.4	せき柱・胸郭 0.4
		せき柱・胸郭 0.4	せき柱・胸郭 0.3	顎関節 0.3	栄養状態 0.2
		蛋白検出の者 0.3	蛋白検出の者 0.3	その他の皮膚疾患 0.3	心臓の疾病・異常 0.2
		歯垢の状態 0.1	言語障害 0.3	尿糖検出の者 0.2	腎臓疾患 0.2
		歯肉の状態 0.1	尿糖検出の者 0.1	結核対策委員会の要検討者 0.1	その他の皮膚疾患 0.1
心臓の疾病・異常 0.1	腎臓疾患 0.1	腎臓疾患 0.1 言語障害 0.1	尿糖検出の者 0.1		
0.1%未満	腎臓疾患 0.0	顎関節 0.0 結核 0.0 結核精密検査の対象者 0.0 寄生虫卵保有者 0.0	結核精密検査の対象者 0.0	結核 0.0	

(注)1 「眼の疾患・異常」とは、トラコ-マ、流行性角結膜炎、麦粒腫(ものもらい)、眼炎、斜視、片目失明等である。

2 「耳疾患」とは、中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエ-ル病、耳かいの欠損、耳垢栓塞等である。

3 「鼻・副鼻腔疾患」とは、慢性副鼻腔炎(蓄のう症)、慢性的症状の鼻炎、鼻ポリープ、アレルギー性鼻炎(花粉症等)等である。

4 「歯・口腔のその他の疾患・異常の者」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常等である。

5 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

6 「その他の疾病・異常」とは、本調査のいずれの調査項目にも該当しない疾病・異常(例えば、てんかん、貧血、川崎病等)である。

7 「結核対策委員会の要検討者」とは、結核に関する検診により結核対策委員会で精密検査の要否等の検討を要した者である。

8 「結核精密検査の対象者」とは、上記7の検討の結果、結核の精密検査を必要とされた者である。

2 主な疾病・異常の推移及び概要

主な疾病・異常の近年の推移は、表10のとおりである。

本県の概要は以下のとおりである。

裸眼視力1.0未満の者

小学校、中学校及び高等学校において、前年より増加し又全国平均を上回った。特に高等学校は大幅な増加(9.7ポイント増)であった。

耳疾患、鼻・副鼻腔疾患、口腔咽喉頭疾患・異常

幼稚園及び小学校において、3項目すべて前年より増加した。

むし歯

幼稚園から高等学校のすべてにおいて、全国平均を上回るものの、前年より減少している。幼稚園及び小学校においては、2年連続の減少である。

ぜん息

幼稚園及び小学校においては、前年までの増加傾向から本年は減少したのに対し、中学校及び高等学校においては、前年より増加し、増加傾向にあった一昨年並みとなった。

表10 主な疾病・異常の推移

(単位：%)

区分		裸眼視力 1.0 未満の 者	耳 疾 患	鼻 ・ 副 鼻 腔 疾 患	口 腔 咽 喉 頭 疾 患 ・ 異 常	む し 歯	心 電 図 異 常	蛋 白 検 出 の 者	寄 生 虫 卵 保 有 者	ぜん 息
幼 稚 園	H10	24.2	0.1	0.4	8.6	74.1	-	0.3	0.4	0.4
	16	33.6	0.7	1.2	4.3	63.5	-	0.2	-	0.8
	17	19.9	0.8	1.2	0.4	63.9	-	0.2	-	0.6
	18	X	0.7	1.0	1.1	68.8	-	0.2	-	2.4
	19	X	1.4	1.3	0.9	66.7	-	0.5	-	3.5
	20	X	2.9	1.7	1.7	62.4	-	0.3	-	1.1
	全国H20	28.9	2.8	3.8	1.7	50.3	-	0.5	0.1	2.7
小 学 校	H10	30.1	2.6	5.1	3.1	87.7	2.1	0.4	0.0	2.6
	16	28.9	3.1	5.4	1.8	77.6	1.6	0.3	-	2.1
	17	31.0	3.5	7.9	2.6	74.2	3.1	0.4	-	2.5
	18	29.9	4.0	8.0	2.1	76.3	1.9	0.4	0.0	2.9
	19	30.9	2.9	6.3	2.1	73.8	2.6	0.3	-	3.6
	20	31.9	4.7	8.4	3.5	73.4	2.2	0.3	0.0	3.2
	全国H20	29.9	5.2	11.9	1.8	63.8	2.7	0.7	0.3	3.9
中 学 校	H10	51.6	1.3	4.5	2.0	87.0	2.8	1.3	-	0.9
	16	50.5	1.9	5.6	1.2	71.3	3.4	1.7	-	1.0
	17	50.4	1.7	6.8	1.0	67.7	2.6	0.9	-	1.3
	18	49.8	1.3	6.5	1.2	67.7	2.5	0.8	-	1.9
	19	55.2	3.3	11.2	0.9	70.2	2.6	1.4	-	1.6
	20	55.8	1.9	4.2	3.0	64.1	3.5	1.1	-	2.1
	全国H20	52.6	3.6	10.8	1.1	56.0	3.5	2.5	-	3.0
高 等 学 校	H10	60.1	0.2	1.9	0.6	89.2	4.1	1.0	-	0.4
	16	56.8	0.1	3.5	0.8	80.5	3.2	0.7	-	0.3
	17	56.7	0.3	6.0	0.9	78.5	3.2	1.2	-	0.6
	18	X	0.5	8.0	1.1	75.3	3.3	1.3	-	1.2
	19	51.1	0.2	3.1	0.3	76.8	3.8	1.3	-	0.5
	20	60.8	0.5	2.6	0.5	73.0	3.1	1.2	-	1.0
	全国H20	58.0	2.0	8.8	0.6	65.5	3.1	2.8	-	1.8

(注) 1 小数点以下第2位を四捨五入している。

2 心電図異常については、6歳、12歳、15歳のみ実施している。

3 寄生虫卵保有者については、5歳から8歳のみ実施している。

### 3 裸眼視力 1.0 未満の者の推移

裸眼視力 1.0 未満の者の割合は、表 11 のとおりである。

前年度と比べると、小学校では 1.0 ポイント、中学校では 0.6 ポイント増加している。

10 年前(平成 10 年度)と比べると、小学校では 1.8 ポイント、中学校では 4.2 ポイント増加し、高等学校では 0.7 ポイント増加している。

また、裸眼視力 1.0 未満の者の割合は、小学校、中学校及び高等学校で全国平均を上回っている(表 11)。

表 11 裸眼視力1.0未満の者の推移

(単位：%)

区 分		H10	H16	H17	H18	H19 (A)	H20 (B)	差 (B-A)	全国H20 (C)	差 (B-C)
幼稚園	計	24.2	33.6	19.9	X	X	X	-	28.9	-
	1.0未満 0.7以上	21.7	22.9	15.6	X	X	X	-	22.0	-
	0.7未満 0.3以上	2.5	10.5	4.3	X	X	X	-	6.1	-
	0.3未満	-	0.2	-	X	X	X	-	0.8	-
小学校	計	30.1	28.9	31.0	29.9	30.9	31.9	1.0	29.9	2.0
	1.0未満 0.7以上	13.9	12.9	12.8	11.7	13.4	12.6	0.8	11.2	1.4
	0.7未満 0.3以上	10.1	10.7	11.9	11.7	10.7	12.1	1.4	11.6	0.5
	0.3未満	6.2	5.4	6.3	6.4	6.8	7.1	0.3	7.1	0.1
中学校	計	51.6	50.5	50.4	49.8	55.2	55.8	0.6	52.6	3.2
	1.0未満 0.7以上	13.4	12.9	12.5	13.0	14.7	11.7	3.0	12.4	0.7
	0.7未満 0.3以上	18.0	17.5	17.5	18.5	19.0	19.5	0.5	17.8	1.7
	0.3未満	20.2	20.2	20.4	18.3	21.4	24.6	3.2	22.4	2.2
高等学校	計	60.1	56.8	56.7	X	51.1	60.8	9.7	58.0	2.8
	1.0未満 0.7以上	12.1	14.8	12.7	X	11.3	X	-	12.6	-
	0.7未満 0.3以上	19.0	20.9	17.6	X	17.8	X	-	17.1	-
	0.3未満	29.0	21.1	26.4	X	22.0	X	-	28.4	-

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

図 9 裸眼視力1.0未満の推移グラフ

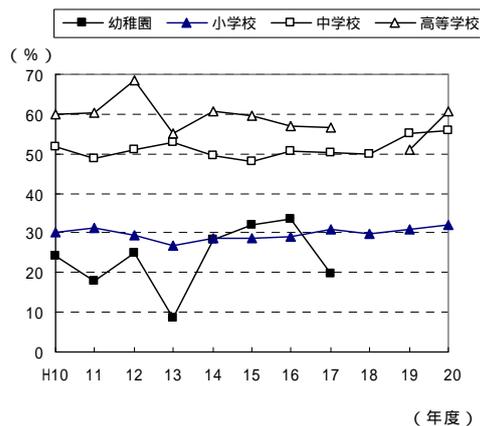
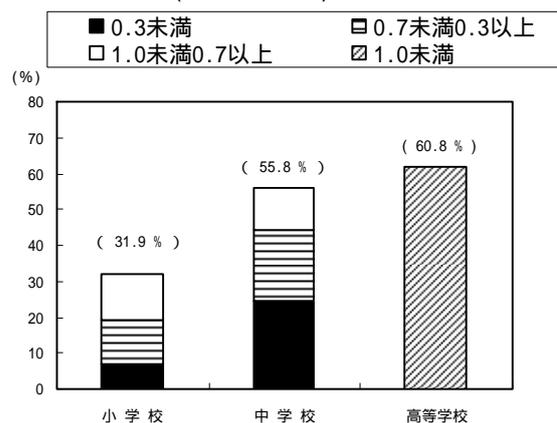


図 10 学校種別裸眼視力1.0未満の者の割合(平成20年度)



#### 4 鼻・副鼻腔疾患の推移

鼻、副鼻腔疾患(蓄のう症、アレルギー性鼻炎(花粉症等)等)の者の割合は、幼稚園 1.7%、小学校 8.4%、中学校 4.2%、高等学校 2.6%となっており、幼稚園及び小学校で前年度より増加している。

また、鼻・副鼻腔疾患の者の割合は、各学校段階すべてで全国平均を下回っている(表 12)。

**表12 鼻・副鼻腔疾患率の推移**

(単位：%)

区 分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
平成10年度	0.4	5.1	4.5	1.9
平成16年度	1.2	5.4	5.6	3.5
平成17年度	1.2	7.9	6.8	6.0
平成18年度	1.0	8.0	6.5	8.0
平成19年度(A)	1.3	6.3	11.2	3.1
平成20年度(B)	1.7	8.4	4.2	2.6
増 減 (B - A)	0.4	2.1	7.0	0.5
平成20年度全国平均(C)	3.8	11.9	10.8	8.8
比 較 (B - C)	2.1	3.5	6.7	6.2

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

#### 5 むし歯の推移

むし歯について「処置完了者」と「未処置歯のある者」に区分してみると表 13 のとおりである。

むし歯の被患率(治療済みの者を含む。)は、幼稚園で 62.4%、小学校で 73.4%、中学校で 64.1%、高等学校では 73.0%となっている。

むし歯の被患率は、30 年前(昭和 53 年度)には各学校段階で 8 割を超え、20 年前(昭和 63 年度)も 30 年前と同程度の水準であったが、近年は低下傾向にある。

また、むし歯の被患率は、すべての学校段階で全国平均を上回っている(表 13)。

**表13 むし歯被患率の推移**

(%)

区 分	S53	S63	H10	H16	H17	H18	H19 (A)	H20 (B)	差 (B - A)	全国H20 (C)	差 (B - C)
幼 計	88.5	85.1	74.1	63.5	63.9	68.8	66.7	62.4	4.3	50.3	12.2
稚 処 置 完 了 者	10.1	22.6	28.6	16.7	21.5	24.7	24.2	25.7	1.5	20.3	5.4
園 未 処 置 歯 の ある 者	78.4	62.5	45.5	46.9	42.4	44.1	42.5	36.7	5.8	29.9	6.8
小 計	96.8	93.7	87.7	77.6	74.2	76.3	73.8	73.4	0.4	63.8	9.6
学 処 置 完 了 者	16.0	32.3	41.5	36.1	31.7	36.3	32.9	34.1	1.2	30.9	3.2
校 未 処 置 歯 の ある 者	80.8	61.4	46.2	41.5	42.5	39.9	40.9	39.3	1.6	32.9	6.4
中 計	92.1	91.3	87.0	71.3	67.7	67.7	70.2	64.1	6.1	56.0	8.1
学 処 置 完 了 者	26.6	36.7	42.8	38.3	37.8	36.0	34.3	35.3	1.0	30.4	5.0
校 未 処 置 歯 の ある 者	65.5	54.5	44.3	33.0	29.9	31.7	35.9	28.8	7.1	25.6	3.1
高 計	95.4	95.4	89.2	80.5	78.5	75.3	76.8	73.0	3.8	65.5	7.5
等 学 校 処 置 完 了 者	26.8	36.1	44.6	46.3	46.1	39.7	39.8	42.3	2.5	36.0	6.3
校 未 処 置 歯 の ある 者	68.7	59.3	44.6	34.3	32.4	35.5	37.0	30.6	6.4	29.5	1.2

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

図11 むし歯被患率の推移グラフ

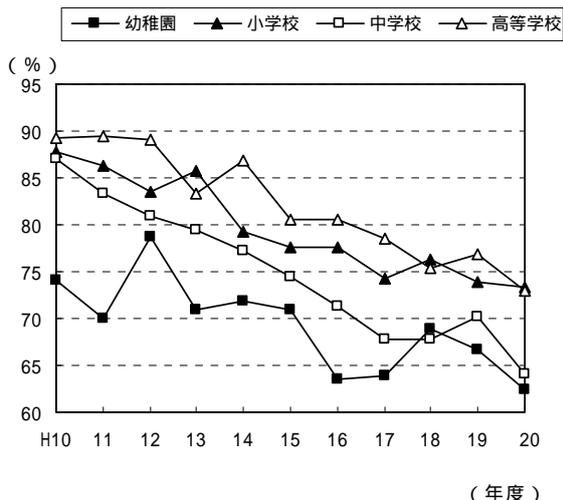
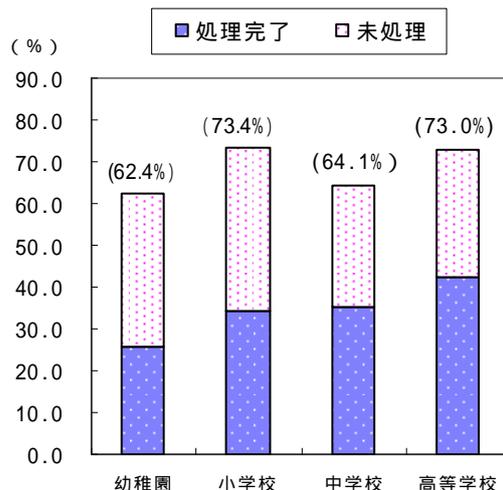


図12 むし歯の処理状況 (平成20年度)



6 12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯数等の推移

12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯数等(喪失歯及びむし歯数)についてみると表14のとおりであり、喪失歯数は変化がないが、むし歯数は1.8本となっており、昭和59年に調査を開始して以来おおむね減少傾向にある。

10年前(平成10年)と比べると1.6本減少している。

また、12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯数等は、全国平均を上回っている(表14)。

表14 12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯等数の推移

(単位:本)

区分	H10	H16	H17	H18	H19 (A)	H20 (B)	差 (B-A)	全国H20 (C)	差 (B-C)
合計	3.4	2.1	2.0	2.0	2.2	1.8	0.4	1.5	0.3
喪失歯数	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
むし歯	小計	3.3	2.1	2.0	2.0	2.2	0.4	1.5	0.3
	処置歯数	2.3	1.4	1.4	1.3	1.3	0.2	1.0	0.2
	未処置歯数	1.0	0.6	0.6	0.6	0.9	0.2	0.6	0.1

(注) 差の欄については、小数点以下第2位四捨五入により、掲載上の計算値と一致しない箇所がある。

7 心電図異常の推移(6歳、12歳及び15歳のみ)

心電図異常の者の割合は、小学校2.2%、中学校3.5%、高等学校3.1%となっており、中学校では前年度より増加し、小学校及び高等学校では前年度より減少している。

また、心電図異常の者の割合は、小学校で全国平均を下回っている(表15)。

表15 心電図異常率の推移

(単位:%)

区分	6歳(小学校1年)	12歳(中学校1年)	15歳(高等学校1年)
平成10年度	2.1	2.8	4.1
平成16年度	1.6	3.4	3.2
平成17年度	3.1	2.6	3.2
平成18年度	1.9	2.5	3.3
平成19年度(A)	2.6	2.6	3.8
平成20年度(B)	2.2	3.5	3.1
増減(B-A)	0.4	0.9	0.7
平成20年度全国平均(C)	2.7	3.5	3.1
比較(B-C)	0.5	0.0	0.0

## 8 ぜん息の推移

ぜん息の者の割合は、幼稚園 1.1%、小学校 3.2%、中学校 2.1%、高等学校 1.0%となっており、中学校及び高等学校で前年度より増加している。

また、ぜん息の者の割合は、各学校段階すべてで全国平均を下回っている(表 16)。

**表16 ぜん息被患率の推移**

(単位：%)

区 分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
平成10年度	0.4	2.6	0.9	0.4
平成16年度	0.8	2.1	1.0	0.3
平成17年度	0.6	2.5	1.3	0.6
平成18年度	2.4	2.9	1.9	1.2
平成19年度(A)	3.5	3.6	1.6	0.5
平成20年度(B)	1.1	3.2	2.1	1.0
増 減 (B - A)	2.4	0.4	0.5	0.5
平成20年度全国平均(C)	2.7	3.9	3.0	1.8
比 較 (B - C)	1.6	0.7	0.9	0.8

### 第3 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

発育状態調査結果から算出した肥満度に基づく、肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率を年齢別にみると、表17、表18及び図13から図16のとおりである。

#### 1 肥満傾向児

本県の男子の肥満傾向児の出現率は、5歳及び9歳から13歳の各年齢で前年より増加しており、前年と同様に、15歳が19.20%で最も高くなっている。

同じく女子は、5歳、6歳、8歳、9歳、11歳及び15歳から17歳の各年齢で前年より増加しており、11歳が15.74%で最も高くなっている。

全国との比較でみると、男子は16歳を除くすべての年齢、女子はすべての年齢で、本県は全国平均を上回っているものの、ここ2年間においては、男女ともに、15歳から17歳にかけて全国平均に収束する傾向を示している(表17、図13、図14)。

表17 年齢別 肥満傾向児の出現率 (単位：%)

区 分	本県						全国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H20 (A)	H19 (B)	前年差 (A-B)	H20 (C)	H19 (D)	前年差 (C-D)	H20 (E)	H20 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	5.65	5.49	0.16	5.22	3.64	1.58	2.87	2.78	2.78	2.44
	6歳	5.84	7.50	1.66	9.44	8.14	1.30	4.52	4.57	1.32	4.87
小学校	7歳	8.03	9.10	1.07	7.71	9.75	2.04	6.19	5.88	1.84	1.83
	8歳	12.26	16.01	3.75	12.41	10.16	2.25	8.03	7.18	4.23	5.23
	9歳	15.19	14.67	0.52	11.37	10.75	0.62	10.36	7.91	4.83	3.46
	10歳	17.57	14.78	2.79	11.12	11.49	0.37	11.32	9.42	6.25	1.70
	11歳	14.51	14.21	0.30	15.74	11.50	4.24	11.18	9.68	3.33	6.06
中学校	12歳	17.13	17.04	0.09	11.61	11.70	0.09	11.97	9.84	5.16	1.77
	13歳	14.41	12.47	1.94	10.95	12.69	1.74	10.28	9.05	4.13	1.90
	14歳	11.04	13.02	1.98	9.89	13.32	3.43	9.99	8.54	1.05	1.35
高等学校	15歳	19.20	20.07	0.87	14.03	11.22	2.81	13.45	9.56	5.75	4.47
	16歳	9.35	12.69	3.34	12.36	11.95	0.41	11.85	8.40	2.50	3.96
	17歳	12.42	15.17	2.75	10.14	8.86	1.28	12.33	8.64	0.09	1.50

(注) 肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。

$$\text{肥満度} = (\text{実測体重} - \text{身長別標準体重}) / \text{身長別標準体重} \times 100\%$$

図13 肥満傾向児の出現率グラフ(男子)

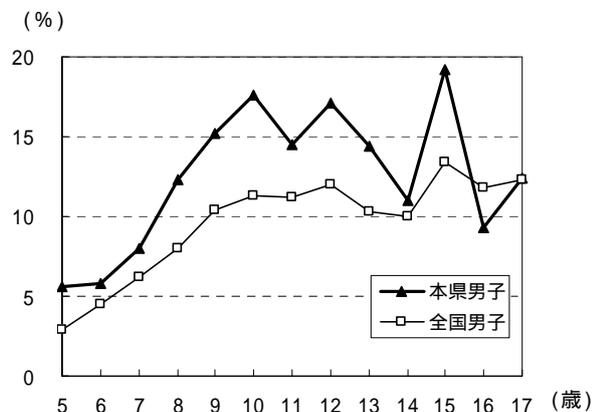
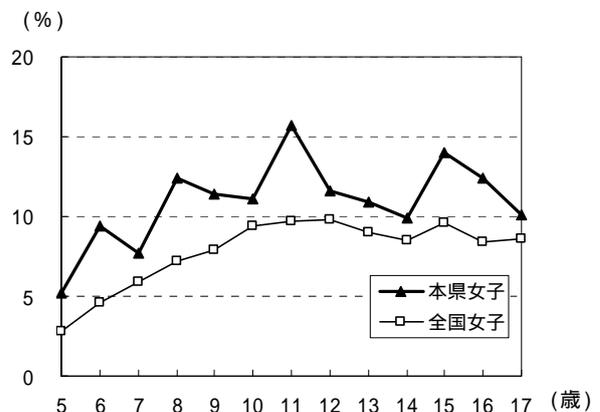


図14 肥満傾向児の出現率グラフ(女子)



## 2 痩身傾向児

本県の男子の痩身傾向児の出現率は、5歳、6歳、11歳、13歳から15歳及び17歳の各年齢で前年より増加しており、11歳が3.33%で最も高くなっている。

同じく女子は、5歳から7歳、11歳、13歳、14歳、16歳及び17歳の各年齢で前年より増加しており、13歳が2.68%で最も高くなっている。

全国との比較でみると、男子は5歳から7歳、11歳及び14歳、女子は5歳から7歳及び17歳の各年齢で、本県は全国平均を上回っている(表18、図15、図16)。

表18 年齢別 痩身傾向児の出現率 (単位：%)

区 分		本県						全国		本県と全国との差	
		男			女			男	女	男	女
		H20 (A)	H19 (B)	前年差 (A-B)	H20 (C)	H19 (D)	前年差 (C-D)	H20 (E)	H20 (F)	(A-E)	(C-F)
幼稚園	5歳	0.38	0.00	0.38	0.71	0.13	0.58	0.35	0.50	0.03	0.21
	6歳	0.47	0.00	0.47	1.13	0.86	0.27	0.46	0.54	0.01	0.59
小学校	7歳	0.55	0.59	0.04	1.01	0.68	0.33	0.43	0.57	0.12	0.44
	8歳	0.39	1.27	0.88	0.44	1.62	1.18	0.80	1.01	0.41	0.57
	9歳	1.15	1.19	0.04	0.79	1.51	0.72	1.25	1.51	0.10	0.72
	10歳	1.99	2.54	0.55	0.94	2.30	1.36	2.39	2.42	0.40	1.48
	11歳	3.33	1.84	1.49	2.10	1.22	0.88	2.75	2.69	0.58	0.59
中学校	12歳	1.52	2.08	0.56	2.46	3.48	1.02	2.25	3.91	0.73	1.45
	13歳	0.96	0.45	0.51	2.68	2.54	0.14	1.68	3.39	0.72	0.71
	14歳	1.90	0.88	1.02	1.31	1.26	0.05	1.75	2.69	0.15	1.38
高等学校	15歳	1.37	0.76	0.61	1.15	1.74	0.59	2.24	2.51	0.87	1.36
	16歳	1.29	1.60	0.31	1.93	0.78	1.15	1.75	2.07	0.46	0.14
	17歳	0.88	0.33	0.55	2.44	0.18	2.26	1.96	1.74	1.08	0.70

(注) 痩身傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が-20%以下の者である。

図15 痩身傾向児の出現率グラフ(男子)

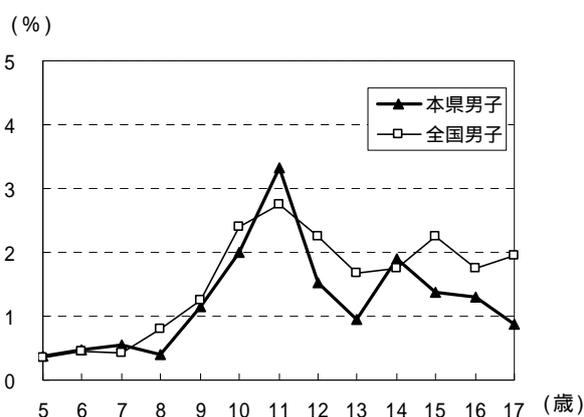


図16 痩身傾向児の出現率グラフ(女子)

